

# かけがわ学力向上ものがたり

「夢に向かって、自ら考え自ら判断し、心豊かにたくましく生きる子ども」を育むために

「解決したい!」と学習問題に向かう真剣なまなざし。「できるようにになりたい!」と夢中になって取り組むときの表情。「よりよい考えを生み出したい!」と熱心に議論する姿。いつの時代も、こうした子どもたちの姿が変わることはありません。

『「令和の日本型学校教育」の構築を目指して(令和3年1月26日中央教育審議会答申)』では、「一人一人の児童生徒が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるよう、その資質・能力を育成することが求められている」と、社会の変化に応じた教育観の転換について改めて示されました。

そこで、掛川市教育委員会では、「創像力」「創合力」「創律力」からなる「未来を切り拓く3つの創る力」を生み出し、その育成に重点を置くこととしました。学習者である子どもが学びの中心にいることを改めて確認し、3つの創る力をどのように発揮させ、育成していくかを、市民総ぐるみで考え、議論してほしいと願っています。その上で、社会の変化に柔軟に対応し、たくましく、自分らしく生きていくことができる人を育ていけるよう、私たち大人も「3つの創る力」を発揮しながら、子どもの学びの伴走者となっていきましょう。

教育長 佐藤 嘉晃

令和4年3月  
掛川市教育委員会



# 目次

序章「かけがわ学力向上ものがたり」策定のねらい	1
第1章 掛川市が目指す「学力」とは	2
1 未来を切り拓く3つの創る力「創像力」「創合力」「創律力」	
2 学習指導要領とのつながり	
3 「かけがわ型スキル」	
第2章 「全国学力・学習状況調査」の分析から	7
1 現状と課題	
2 学力の高い子 掛川10の法則	
3 学びの環境改善のための重点	
第3章 学びのものがたり	9
1 新たな学びのスタンダード	
2 地域の人に学ぶ活動の推進	
3 読書活動の推進	
4 プログラミング教育の充実	
5 外国語教育の推進	
6 中学校区学園化構想を生かした教育の推進	
7 全国学力学習状況調査分析結果の活用	
8 市指定研究校による研究成果の共有	
9 学力向上指標	
第4章 令和の家庭のものがたり	21
1 家庭の学びの在り方の研究	
2 かけがわ家庭の学びグランドデザイン	
3 子どもが「創る」学びを学校と家庭が一体となって支える	
第5章 我が校のものがたり(別冊)	25
学力向上のための取組内容      ※ 各校で作成	

## 序章「かけがわ学力向上ものがたり」策定のねらい

掛川市では、子どもたちが『希望』を持ち、夢や目標に向かって自分を磨くことができ、掛川に誇りと愛着を抱きながら、地域でも、グローバルにも活躍する人に、たくましく成長することを願って、『教育大綱かけがわ』を定めました。

この教育大綱のもと、掛川市教育委員会では、掛川市の教育振興基本計画「人づくり構想かけがわ」において、学校教育の基本目標を「夢に向かって、自ら考え自ら判断し、心豊かにたくましく生きる子どもの育成」としています。これを受け、各学校は、「人づくり構想かけがわ」の実現に向けて、子どもたちに基礎的・基本的な知識・技能を確実に習得させ、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力を育むとともに、主体的に学習に取り組む態度を養うことに取り組んできました。しかし、学力の低下が大きな社会問題となる中、改めて、学力の捉え方や向上策、学校・家庭・地域の役割などが問われています。

こうした背景を受け、平成26年3月、掛川市教育委員会では、「学力」とは何かを学校・家庭・地域で共通理解をして、どのようにしたら学力の向上が図れるか、その理念や方法等を「ものがたり」としてまとめた「かけがわ学力向上ものがたり」を策定しました。さらに、令和3年6月、変化の激しい時代を生きる掛川市の子どもたちに付けたい「創像力」「創合力」「創律力」からなる未来を切り拓く3つの創る力を策定し、その育成に重点を置きました。

これを受け、各学校では、一人一台端末のICT環境を最大限活用し、カリキュラム・マネジメントを進める中で、3つの創る力を意図的、計画的に発揮させ、育成するため、これまで以上に「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を図っています。

「かけがわ学力向上ものがたり」の構成は、序章「かけがわ学力向上ものがたり」策定のねらい、第1章「学力」とは、第2章「全国学力・学習状況調査」の分析から、第3章 学びのものがたり、第4章 令和の家庭のものがたり、第5章 我が校のものがたり(各学校で作成)となっています。

各学校においては、児童生徒の学習実態に基づいた学校独自の特色ある「我が校のものがたり」を作成し、それを基盤として全教職員が共通理解のもとに組織的な協働を図り、授業改善に向けて積極的に取り組むことが求められます。

何より子どもの3つの創る力を効果的に発揮させ、十分に育成していくためには、学校と家庭・地域、教育委員会が連携して取り組んでいくことが大切です。

今後、この「かけがわ学力向上ものがたり」のもと、各学校が3つの創る力の育成に取り組み、掛川の一人一人の子どもを育む教育活動の充実に資することを期待します。

# 第1章 掛川市が目指す「学力」とは

## 1 未来を切り拓く3つの創る力「<sup>そうぞうりよく</sup>創像力」「<sup>そうごうりよく</sup>創合力」「<sup>そうりつりよく</sup>創律力」

掛川市ではこれまで、子どもたちが自発的に「かけがわ型スキル」を発揮しながら学べるよう働きかけ、成長を促してきました。この成果は、全国学力学習状況調査においても良い結果としてあらわれており、確実に学力を伸ばしてきています。

そのような中、『「令和の日本型学校教育の構築を目指して」(令和3年1月26日中央教育審議会答申)』が示されました。その中で、急激に変化する時代の中、育むべき資質・能力として、「一人一人の児童生徒が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるよう、その資質・能力を育成することが求められている。」とされています。

これを受け掛川市として、未来を担う子どもたちのためにどのような「力」を育む必要があるのかを検討し、以下の未来を切り拓く「3つの創る力」に集約しました。

### 未来を切り拓く「3つの創る力」

「**創像力**」:先を見通し、考えを収集・分析・整理・統合しながら、新たな価値を生み出していく力

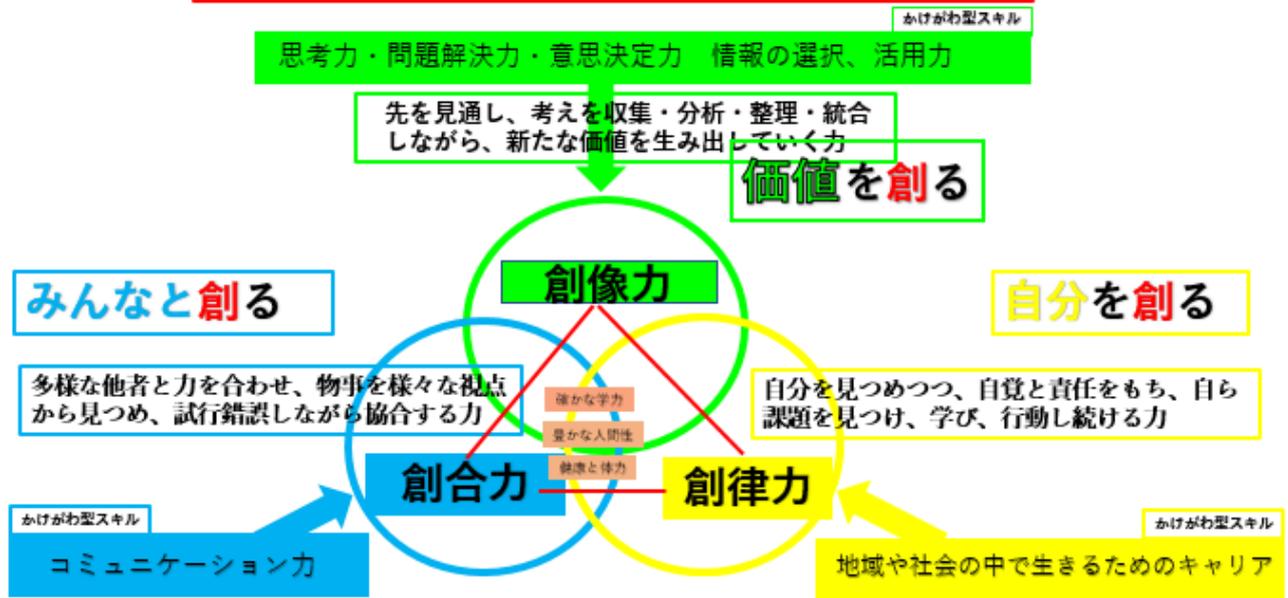
「**創合力**」:多様な他者と力を合わせ、物事を様々な視点から見つめ、試行錯誤しながら協合する力

「**創律力**」:自分を見つめつつ、自覚と責任をもち、自ら課題を見つけ、学び、行動し続ける力

これからの変化の激しい社会を生き抜いていく子どもたちが、自己の可能性を見だし、よりよい未来を創る担い手として、自らの行動に責任をもち、他者と協働しながら、主体的に考え、新たな価値を生み出し、学び続けていけるよう育てていくことが必要です。

そのために、学校教育においては、これまでの「学力観」を大転換し、授業、行事、係活動、児童会・生徒会活動等、教育活動全体を通して、未来を切り拓く「3つの創る力」を身に付けられるようにしていきます。さらには、家庭や地域を含め、市民総ぐるみで子どもたちを育てていけるよう働きかけていきます。

## 未来を切り拓く「3つの創る力」



## お茶の実デザイン



## 2 学習指導要領とのつながり

学習指導要領において、「確かな学力」とは、『知識や技能に加えて、学ぶ意欲や、自分で課題を見付け、自ら学び、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力等までを含めたものを指します。』と書かれています。さらに、新しい時代に必要となる資質・能力として、次の三つの柱が提示されています。

- ① 生きて働く「知識・技能」の習得
- ② 未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」の育成
- ③ 学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性等」の涵養

新しい価値を生み出すために情報を収集・整理・分析・統合しながら（創像力）、多様な他者と協働し（創合力）、学び続ける（創律力）ような経験を繰り返す中で、学習指導要領で示された「確かな学力」、そして新しい時代に必要となる資質・能力も確実に身に付けられます。授業者は、子どもたちがこれらの資質・能力を繰り返し発揮できるような学びの場を、意識して提供し続けなくてはなりません。

「何を教えるか」だけではなく、子どもたちが「何ができるようになるか」という学習者の視点を大切に授業観をもち、最先端の ICT 環境を生かすことで、「未来を切り拓く3つの力」を育むための授業を目指します。



### かけがわ学力向上宣言

～未来を切り拓く「3つの創る力」を意識することを通して～

その1 生きて働く知識・技能を身に付けます。

その2 未知の状況に対応できる思考力・判断力・表現力を身に付けます。

その3 学びを社会や自分の人生に生かそうとする学びに向かう力や人間性を身に付けます。

### 3 「かけがわ型スキル」

掛川市では、これからのグローバル社会を生き抜くために求められる思考力や問題解決能力、人とのかかわるコミュニケーション能力など、これからの時代を担う子どもたちが身に付けるべき「21世紀型スキル※」を参考にして、「かけがわ型スキル」6項目を定めています。このかけがわ型スキルを授業や行事など、すべての教育活動の中で子どもたちが自発的に発揮できるように働きかけることを通して、未来を切り拓く「3つの創る力」を育みます。9年間の義務教育の中で大きく成長させます。

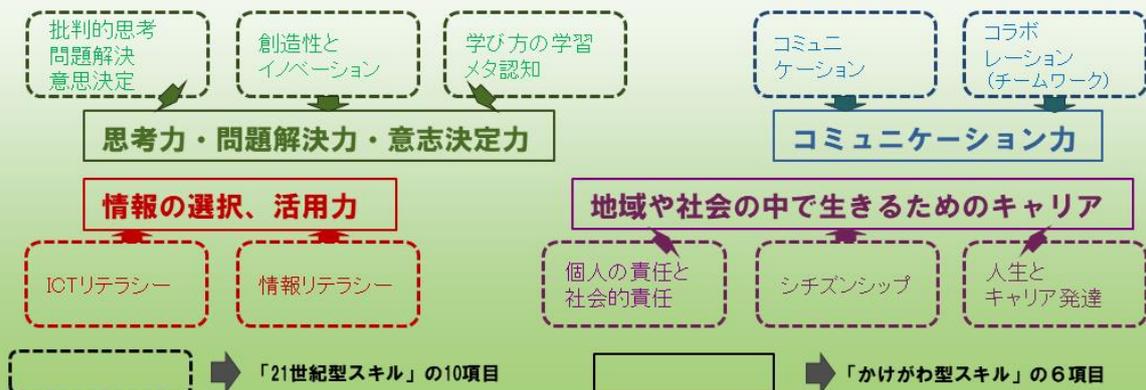
「かけがわ型スキル」とは…

- ①思考力
- ②問題解決力
- ③意思決定力
- ④コミュニケーション力
- ⑤情報の選択・活用力
- ⑥地域や社会の中で生きるためのキャリア

※世界の教育関係者らが立ち上げた国際団体「ATC21s」(The Assessment and Teaching of 21st-Century Skills=21世紀型スキル効果測定プロジェクト)が提唱する概念。

#### 「かけがわ型スキル」と「21世紀型スキル」

「かけがわ型スキル」は、「21世紀型スキル」を参考にして、大切にしたいスキルを、分かりやすい言葉を使って示しました。



## かけがわ型スキルを育む学校教育 ～かけがわ茶モデル～

夢とところざしをもち、ともに学び豊かな未来を創造する『かけがわの子ども』



一人一台端末を生かした「新たな学びのスタンダード」

小中一貫カリキュラム・中学校区学園化構想を生かした教育の推進

## 第2章「全国学力・学習状況調査」の分析から

### 1 現状と課題

新型コロナウイルス感染症や GIGA スクール構想など、現在の社会には急激な変化が起きており、周りの状況の変化や環境に適応しながら、困難な状況に立ち向かうことのできる人間の育成がより一層求められています。掛川市では、21世紀を生き抜く子どもたちに、思考力・問題解決力・意思決定力、コミュニケーション力、情報の選択・活用力、地域や社会の中で生きるためのキャリアといった「かけがわ型スキル」を身に付けさせるため、学校だけでなく、家庭・地域等が連携して市民総ぐるみの教育を進めています。

全国学力・学習状況調査結果から、自らの教育及び教育施策の改善、各児童生徒の全般的な学習状況の改善等につなげていくことが重要です。令和3年度の結果から見えてきた掛川市内児童生徒の学力の概要は、以下のようになります。

※全国・県の平均正答率を100とした場合の市の平均正答率の指標値

【小学校】	小学校国語	小学校算数
全国比較指標値	99	100
県比較指標値	99	101
【中学校】	中学校国語	中学校数学
全国比較指標値	104	105
県比較指標値	102	101

〈教科に関する調査結果から(小学校)〉

- 国語では、「話すこと・聞くこと」の領域は、令和元年度と同様に正答率が高い傾向となった。一方で、「目的を意識して中心となる語や文を見つけて要約する」「文の中における修飾と被修飾との関係を捉える」といった問題に課題があった。
- 算数では、総じて、平均正答率は県や全国とほぼ同じであった。わり算の問題については、高い正答率であった。しかし、意味理解が不十分のため、「知識・技能」を正しく活用する問題、「思考・判断・表現」を問う(式や言葉で説明する)問題の正答率が低い傾向にあった。

〈教科に関する調査結果から(中学校)〉

- 国語では、どの領域においても全国・県の平均正答率を上回った。無回答率も低く、学習課題に前向きに取り組む生徒の様子がうかがえた。一方で、「書いた文章を読み返し、語句や文の使い方、段落相互の関係に注意して書く」「文脈の中における語句の意味を理解する」といった問題に課題があった。
- 数学では、ほぼすべての領域で全国、県の平均正答率を上回るか、あるいは同程度であり、特に図形の領域において大きく上回った。また、無回答率においても、全国、県の値に比べて良好な数値であった。一方で、「中央値を求める」「グラフの特徴を基に説明する」といった問題に課題があった。

## 2 学力の高い子 掛川 10 の法則

「令和3年度全国学力・学習状況調査」において、「児童生徒質問紙」と「学力」の相関関係を分析すると、次のような子どもが、国語や算数・数学の平均正答率が高い傾向にあります。

- ① 朝食を毎日食べている。
- ② 平日の1日当たりのゲーム時間が1時間より少ない。
- ③ 読書を1日10分以上している。
- ④ 話し合う活動を通じて、考えを深めたり広げたりすることができている。
- ⑤ 相手の考えを最後まで聞いて受け止め、自分の考えをしっかり伝えている。
- ⑥ 課題の解決に向けて、自分で考え、自分から進んで取り組んでいる。
- ⑦ 学習内容を見直し、次の学習につなげることができている。
- ⑧ 難しいことでも、失敗を恐れなくて挑戦している。
- ⑨ 人の役に立つ人間になりたいと思う。
- ⑩ 地域の行事に参加している。

10の法則から分かる学力向上4つのポイント

○基本的な生活習慣 ○望ましい学習態度 ○学習を支える前向きな心 ○地域への愛着

## 3 学びの環境改善のための重点

令和3年度掛川市全国学力・学習状況調査分析委員会にて、これまでの報告書「さらなる学校改善に向けて」をもとに、「読書活動の充実」「家庭学習の充実」の2つの環境改善のための重点が示されました。

各小中学校において、児童生徒の実態に応じてさらなる改善を図ります。

### (1) 読書活動の推進

地域ボランティアや学校司書と連携し、「朝読書」や「読み聞かせ」、「ブックトーク」など、読書に親しむ時間を確保する。また、国語科の授業においても、学校司書と連携して「関連図書」として紹介されている本を学校図書館に充実させるなど、読書活動の推進を図る。その他の教科でも知識や情報を得るためのツールとして、日常的に国語辞典を使用したり、一人一台端末を活用しインターネットで検索したりできるようにする。

### (2) 家庭学習の充実

自分の学習状況(到達度、進度)を把握し、調整する能力や自分の興味・関心に応じて、主体的に学習を進める能力を身につけさせるために「全児童生徒への一律で受動的な家庭学習」から「個別最適化された学習を取り入れ、児童生徒の主体性を育む家庭学習」へ転換する。

# 第3章 学びのものがたり

## 1 新たな学びのスタンダード

全国学力・学習状況調査の結果からも明らかであるように、掛川市の学力は高い水準を維持しています。これは、各校が授業改善のための研修を積み重ねた結果であります。

令和3年度、掛川市内のすべての小中学校において一人一台端末と高速通信ネットワークが本格稼働を開始し、学校教育は大きな転換点を迎えました。教師が使う ICT から児童生徒が使う ICT へ、この一人一台端末は、これまで、時間やモノの制約によってチャレンジすることができなかった新たな学びを実現するものになります。

これからの ICT は主体性を引き出すためのツールとして、創造性のある対話を生み出すツールとして、また、深い学びへ導くためのツールとして、一人一台端末や高速ネットワークが子どもたちの学びを支えます。そして、鉛筆やノート、ホワイトボードなどと同じように子どもたちがいつでも使える学びのマストアイテムになります。

これまでの授業改善の取組を大切にしながら、21 世紀を生き抜く子どもたちが「かけがわ型スキル」を身に付け、3つの創る力を向上させるために、ICT を活用した「新たな学びのスタンダード」を実践することで、リアルとオンラインのハイブリッド型授業を目指します。

### 新たな学びのスタンダード

	つかむ	追究する	振り返る	
	<b>主体的・対話的に学びを深める姿を引き出す指導</b>		<b>指導と評価の一体化</b>	
授業展開	<b>問いを引き出す</b> ・導入の工夫 ・ICTの活用 短時間で子どもの「～したい」が生まれる  「なぜ…なのかな。」 「どうすれば…」 「～を考えたいな。」	<b>学び方の工夫</b> ・学習形態の工夫 ・ICT、教具の利用  	<b>教師の働きかけ</b> ・補助発問、指示 ・個に応じた支援  	<b>振り返りの充実</b> ・教師は授業改善と支援 「～さんは…ができなくて悩んでいるな。次回はこの資料を活用して支援しよう。」 ・子どもは付いた力の実感と自分の学習の調整 「～ができるようになった。」 「～はなぜ…なのかな？もう少し考えたいなあ。」 
	<b>授業を通してかけがわ型スキルを発揮しながら学ぶ</b> ①思考力 ②問題解決力 ③意思決定力 ④コミュニケーション力 ⑤情報の選択・活用力 ⑥地域や社会の中で生きるためのキャリア			
ICTの活用	<b>効果的に問いを共有</b> ・画像、動画の活用 ・大きく映す etc. 	<b>考える材料の確保・多様性の可視化・学習活動の記録</b> ・インターネット活用 ・資料の共有 ・端末画面の共有 ・アプリ活用 ・写真、動画撮影  		
	学びのユニバーサルデザイン 言語活動の充実 プログラミング教育の充実 キャリアパスポートの活用		教師へ学習記録の送信 学習記録のデータ保存 etc.  	
ICT環境（一人一台端末・高速ネットワーク）、ICT支援員				
<b>新たな学びのスタンダードを実践するための単元、授業設計の視点</b>				

## (1) 新たな学びのスタンダードを実践するための単元、授業設計の視点

### ア 押さえる

単元で付けたい力を学習指導要領で確認する。

- ①生きて働く「知識・技能」の習得
- ②未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」の育成
- ③学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性等」の涵養

単元で付けたい力を付けるための各時間の授業の目標を設定する。ここで、教科の見方や考え方を働かせて学ぶ姿や知識・技能を活用する姿など、目標を達成させるために本時の授業で引き出したい子どもの姿を具体的にイメージする。

### イ 仕掛ける

アでイメージした姿を引き出すためにどのような手立てが必要か考える。

- ・どのような追究するための材料が必要か（資料、既習事項、場の設定）
- ・どのような学び方が必要か（ICT、教具、学習形態）
- ・どのような教師の働きかけが必要か（発問、指示）

### ウ 確かめる

子どもが自分の学びを振り返り、わかったことをまとめ、新たな疑問を生み出すことができるような学びを実感したり、調整したりする学習改善の場を設ける。

#### 【学びを実感したり調整したりする姿の例】

「今日は…を意識したら…ができるようになった。」

「まだ…が十分にできない。次の授業では～を意識して取り組みたい。」

「～を…するにはどうしたらよいのだろう。他の人の方法を見てみたい。」

「…は～であることが疑問だ。…についてもう少し調べてみたい。」 etc.

また、指導と評価を一体化させるために、教師がこの振り返りの姿から指導を振り返り、指導を改善したり、個への支援へつなげたりする。そのために、記録に残す評価や子どもを見取り、指導に生かす評価など、振り返りの内容や方法を吟味し、単元計画に適切に位置づける。

## (2) 3つの創る力育成のための指導の重点

これまでの新たな学びのプロセスを基盤とした授業改善により、子どもの追究する時間が十分に確保される授業が多く見られるようになりました。しかし、教師の一方的な説明や「~しよう」の働きかけに応じるだけで授業が進み、子どもの問いや意欲が生まれず、主体的に学ぶ姿が見られない授業もあります。

3つの創る力を育む教師は、指導観を大きく転換し、子どもがもつ自ら学ぶ力を信じ、その学びを引き出し、促進する「ファシリテーター」として、資料提示、教具、発問など、子どもの思いに寄り添った仕掛けを行うスキルを高めていくことが求められます。また、「付けたい力」を明確にし、一人一人の学び方の違いを丁寧に見取ることで、「なぜ~だろうか」「どのように~すればよいのか」「もっと~したい」など、子どもの問いや意欲が生まれ、切れ目なく続いていくような単元・授業を構想し、子どもたちが自発的に3つの創る力を発揮して学ぶような学習活動を展開する必要があります。

一見うまくいったように見える授業でも、知識や技能が定着していなかったり、思考力や判断力、表現力が高まっていなかったりと、子どもが主体的に学習に取り組む態度が十分に養われていないこともあります。一人一人の子どもが本時の授業で学んだことを振り返ることなく授業を終えてしまえば、教師が指導の成果を振り返ることができないばかりでなく、子どもも付いた力を実感できません。子ども一人一人の学びの過程を大切にしながら、「本当に付けたい力が付いたのか」という視点を常にもち、教師も子どもも適切な学習評価を行うことのできる時間を確保する必要があります。

さらに、令和3年度より、すべての小中学校に一人一台端末が整備されました。この新たなテクノロジーは子どもの主体性をより一層引き出すことが可能になるだけでなく、各教科の本質的な学びをさらに深めることが可能になります。

以上のことから、掛川市では以下の3つを重点指導項目として掲げ、未来を切り拓く3つの創る力の育成をより一層推し進めます。

### 重点指導項目

#### ①「つかむ」…子どもの主体性を引き出す導入の工夫

「考えたい」「伝えたい」「やってみたい」「比べたい」「調べたい」…など、子どもの「~したい」を引き出すように仕掛ける。

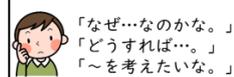
教師の一方的な知識伝達のような子どもが受け身で学ぶ授業では、未来の社会に生きる3つの創る力は発揮されにくいことを認識し、子どもが自らの意志で学びに向かうことができるように、一人一人の学び方の違いを丁寧に見取り、教師は資料提示や教具、発問など、子どもの思いに寄り添った授業の仕掛けを構想する。

特に、ICT は子どもの「~したい」を引き出す有効なツールである。インターネット、デジタル教材などを活用し、短い時間で子どもの問いを学級全体で共有させる。

#### 問いを引き出す

- ・ 導入の工夫
- ・ ICTの活用

短時間で子どもの  
「~したい」  
が生まれる



P.7「新たな学びのスタンダード」より

## ②「追究する」・・・主体的・対話的で深い学びのためのICT活用

一人一台端末の整備により、これまで以上に子どもの学び方や意見の多様性を可視化することが容易になる。写真や動画などの端末の機能を用いて、教師が子どもの学びの姿を記録して他の子どもの端末にデータ送信したり、子ども自身が自分や他者の学びの姿を記録し、他者と共有したりするなど、テクノロジーの力を使って自分の考えや他者の考えと対比する場面を設けることで、自分の知識や技能、考え方や表現がよりよくなることを実感させる。

学び方の工夫	教師の働きかけ
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 学習形態の工夫</li> <li>・ ICT、教具の利用</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 補助発問、指示</li> <li>・ 個に応じた支援</li> </ul>
	
 <p>「自分の考えは他の考えと比べてどうだろうか？比較したいな。」          「あっ！そうか。その考え方は思いつかなかった。なるほど・・・。」          「もっとこうしてみたらどうだろうか。提案してみよう。」</p>	

P.7「新たな学びのスタンダード」より

また、各教科や総合的な学習の時間の内容によっては、オンライン学習、遠隔学習など、地域の人材や大学教員、専門家らとオンラインで連携し、子どもが新たな見方や考え方を獲得することで、学びを深めることができるようにする。

	つかむ	追究する	振り返る
ICT の 活 用	<b>効果的に問いを共有</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 画像、動画の活用</li> <li>・ 大きく映す</li> <li>etc.</li> </ul> 	<b>考える材料の確保・多様性の可視化・学習活動の記録</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ インターネット活用</li> <li>・ 資料の共有</li> <li>・ 端末画面の共有</li> <li>・ アプリ活用</li> <li>・ 写真、動画撮影</li> </ul> 	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 教師へ学習記録の送信</li> <li>・ 学習記録のデータ保存</li> <li>etc.</li> </ul> 

P.7「新たな学びのスタンダード」より

## ③「振り返る」・・・学びを実感する振り返りの充実

子どもが自分の学びを振り返り、わかったことを自分なりにまとめたり、新たな疑問を生み出したりできるような学びを実感したり調整したりする学習改善の場を適切に設ける。また、教師がこの振り返りの姿から指導を振り返り、指導を改善したり、個への支援へつなげたりする。そのために、記録に残す評価や子どもを見取る評価など、振り返りの内容や方法を吟味し、単元計画に適切に位置づける。(指導と評価の一体化)

なお、一人一台端末を活用することで、学びのあしあと(学習履歴)をデータ保存し、学びの成果を教師と共有することが可能となる。特に、写真や動画の撮影機能を用いることで、実物や動き、音など、これまで残すことができなかった学びのあしあとを記録することができる。

そして、子どもが振り返ったことをもとに、家庭でさらに追究を進めたり、技能を高めたりできるように次の授業や家庭学習につなげる。

また、学習支援ソフトウェア(ドリル教材や確認教材など)を用いることで、子どもは自己の課題に応じた学習に取り組むことができたり、教師は子どもの学習状況から適切な支援ができたなど、個別最適な学びを実現することが可能となる。

振り返りの充実
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 教師は授業改善と支援</li> </ul>  <p>「～さんは・・・ができなくて悩んでいるな。次回はこの資料を活用して支援しよう。」</p>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 子どもは付いた力の実感と自分の学習の調整</li> </ul>  <p>「～ができるようになった。」          「～はなぜ・・・なのかな？もう少し考えたいなあ。」</p>

P.7「新たな学びのスタンダード」より

### (3) ICT を活用した学びのユニバーサルデザイン

わかりやすい授業をつくっていくために、個々の児童生徒の得意なこと、苦手なことを理解した上で、一人一人に適した支援を考えることが大切です。

ユニバーサルデザインの考え方と共に、ICTを活用し、児童生徒の様々な困難を取り除いたり減らしたりすることにより、児童生徒の可能性を広げることが期待できます。

ア 本時で何を学習するのか、何を考えさせるのかをはっきりさせる「焦点化」

・見通しをもたせる工夫

(例) 実験や実技において、作業手順や方法を見せるためにタブレットPCやプロジェクタ等を使って、拡大提示することで、見通しをもたせる。

・子どもたちが解決したくなるような「問い」の設定

(例) 言葉と併せて、視覚的な指示や教材提示をすることで、興味を引き付け、問いに対する焦点化を促す。

イ 子どもの思考を助けるように、学習している内容をわかりやすく表す「視覚化」

・教材や教具の工夫、板書の構造化

(例) タブレットPCや実物投影機等のズーム機能で、教材を大きく、わかりやすく投影し、興味を引き付けながら視覚的に思考を促したり理解を深めたりする。

ウ 個々の考え方を認め、よりよい支援や授業展開を考える「個への対応」

・困り感や特性に応じた個への支援、授業形態の工夫

(例) 読み書きへの不安がある場合、タブレットPCを活用して、読み書きの作業自体の過程を支援する。

・時間の見通しを持たせ、集中を持続させること、気持ちの切り替えをするために、残り時間が視覚的に把握できるようにICTを活用する。

・発表の時タブレットPCの画面を表示しながら発表することで、発表者は話しやすくなり、聞き手も集中しやすくなる。

### (4) 言語活動の充実

児童生徒が、3つの創る力を身に付け、豊かにかかわり合うことのできる力を高めるためには、全ての教科等で「書く」「話す・聞く」「読む」の言語活動を充実させる必要があります。その際、各教科等のねらいの達成に向けて学習過程に適切に位置付けます。

ア 筋道を立てて論理的に考える力

イ 互いの考えを伝え合う力

ウ 自分の考えを自分の言葉で表現する力

## (5) iPad 及びインターネット環境によって可能な各教科共通の学習展開例

GIGA スクール構想の進展により、授業スタイルは大きく変化することとなりました。特に iPad は、個別最適な学びの必須アイテムとなり、主体的・対話的で深い学びを展開していく上においても効果の高いツールです。従来は、教員の ICT 活用が中心となっていました。今後は子どもたちの ICT 活用を中心とした学習を考える必要があります。以下は、iPad 及びインターネット環境を活用した各教科共通の学習展開例です。

- ア Googleclassroom 等の授業支援ソフトウェアを利用してワークシートの配信、回収、集計、評価
- イ 子ども個々の学習記録をデータで蓄積、進捗状況チェック、学習状況に応じた支援の提供
- ウ 画面共有、同時編集、個人作成データを一つにまとめる、画面上での小集団活動など、協働学習ソフトウェア等の活用
- エ 遠隔地とのオンライン会議、学校外の専門家との意見交換、他の学校との合同授業などリアルタイムで外部と交流する遠隔学習
- オ 学習ドリルと連動した家庭学習の提供、端末持ち帰りによる課題処理、反転学習による授業展開の工夫
- カ 動画撮影、動画編集、記録データの集計・加工、意見のデジタル化と分類、繰り返し再生、スロー再生、遅延再生、拡大縮小、複数の資料を比較、作業の自動化など ICT ならではの機能を活用
- キ インターネットによる情報収集、調査活動、資料データの加工、表現活動の工夫
- ク アンケート機能を利用して意見集計及びリアルタイムで結果を提供
- ケ 子どもたちへのメッセージ配信及び回収、個々への適切な指導・支援
- コ 学習者用デジタル教科書や学習を効果的に支援するアプリやツールの利用

**参考資料：子どもたちの個別最適な学び、協働的な学びを創る【Ver.1】**

## (6) ICT を効果的に活用した学習場面の分類例

教育の情報化に関する手引（文部科学省 令和2年6月追補版）では、ICT を効果的に活用した学習場面は、「一斉指導による学び（一斉学習）」「子どもたち一人一人の能力や特性に応じた学び（個別学習）」「子どもたち同士が教え合い学び合う協働的な学び（協働学習）」の3つの分類例に分けられ、更に細分化すると 10 の分類例に分けられることが示されています。

以下に示す ICT 活用場面例は、それぞれの学習場面や各教科における活用例の一つであり、各教員がこれらを参考にしつつ、子どもの実態に応じて積極的な ICT 活用が展開されることを期待します。

## ア 一斉学習(教師による教材の提示・AI)による ICT 活用場面例

- ・教師が教材を提示する際に、大型提示装置や iPad に、画像、音声、動画などを拡大したり書き込みながら提示したりすることにより、学習課題等を効果的に提示、説明する。
- ・iPad や大型提示装置を用いて、動画・アニメーション・音声等を含む指導者用デジタル教科書・教材を提示することにより、子どもたちの興味・関心の喚起につなげる。
- ・学習活動を焦点化し、子どもたちの学習課題への理解を深める。

## イ 個別学習による ICT 活用場面例

### (ア) 個に応じた学習(B1)

- ・一人一人の特性や習熟の程度などに応じて個に応じた学習を実施する。
- ・個々の特性に応じてカスタマイズできる学習者用デジタル教科書や、習熟の程度や誤答傾向に応じた学習者向けのドリルソフトなどのデジタル教材を活用する。
- ・各自のペースで理解しながら学習を進めて知識・技能を習得する。
- ・発音、朗読、書写、運動、演奏などの活動の様子を記録・再生して自己評価に基づく練習を行うことにより、技能を習得したり向上させたりする。
- ・デジタルポートフォリオを活用して記録したり、自己評価を行ったりする。

### (イ) 調査活動(B2)

- ・インターネットやデジタル教材を用いた情報収集、観察における写真や動画等による記録など、学習課題に関する調査を行う。
- ・iPad 等を用いて写真、動画等の詳細な観察情報を収集、記録、保存することで、細かな観察情報による新たな気づきにつなげる。
- ・インターネットやデジタル教材等を用いたり、専門家とつないだ遠隔学習を通じたりして、効率のよい調査活動と確かな情報収集を行う。
- ・インターネット等で得た情報に記号や番号等を付してソートし整理する。

### (ウ) 思考を深める学習(B3)

- ・シミュレーションなどのデジタル教材を用いて学習課題を試行する。
- ・デジタル教材のシミュレーション機能や動画コンテンツ等を用いることにより、通常では難しい実験・試行を行う。

### (エ) 表現・制作(B4)

- ・写真、音声、動画等のマルチメディアを用いて多様な表現を取り入れた資料・作品を制作する。
- ・写真・音声・動画等のマルチメディアを用いて、多様な表現を取り入れることにより、作品の表現技法の向上につなげる。
- ・個別に制作した作品等を自在に保存、共有することにより、制作過程を手軽に振り返りながら、作品を通じた意見交流を行う。

### (オ) 家庭学習 (B5)

- ・iPad を家庭に持ち帰り、動画やデジタル教科書、教材などを用いて、各自のペースで継続的に授業の予習・復習を行う。
- ・iPad を使ってインターネットを通じた意見交流に参加することにより、学校内だけでは得ることができない様々な意見に触れる。

## ウ 協働学習による ICT 活用場面例

### (ア) 発表や話し合い (C1)

- ・学習課題に対する自分の考えを、書き込み機能を持つ大型提示装置を用いてグループや学級全体に分かりやすく提示して、発表や話し合いを行う。
- ・iPad や大型提示装置を用いて、個人の考えを整理して伝え合う。
- ・iPad を使ってテキストや動画で表現や考えを記録、共有し、何度も見直ししながら話し合うことにより、新たな表現や考えに気づく。

### (イ) 協働での意見整理 (C2)

- ・iPad 等を用いてグループ内で複数の意見、考えを共有し、話し合いを通じて思考を深めながら協働で意見整理を行う。
- ・クラウドサービスを活用するなどして、学習課題に対する互いの進捗状況を把握しながら作業することにより、意見交流を活発させ、学習内容への思考を深める。
- ・クラウドサービスを活用してグループ内の複数の意見、考えを書き込んだスライドや、書き込みをしたデジタル教科書・教材を映すことなどにより、互いの考えを視覚的に共有する。

### (ウ) 協働制作 (C3)

- ・iPad を活用して、写真や動画等を用いた資料及び作品を、グループで分担したり、協働で作業したりしながら制作する。
- ・グループ内で役割分担し、クラウドサービスを活用して、同時並行で作業する。
- ・編集画面を共有して、他者の進み具合や全体像を意識して作業する。
- ・写真や動画等を用いて作品を構成する際、表現技法を話し合いながら制作する。

### (エ) 学校の壁を越えた学習 (C4)

- ・インターネットを活用し、遠隔地や海外の学校、学校外の専門家等との意見交換や情報発信などを行う。
- ・インターネットを用いて他校の子どもたちや地域の人々と交流し、異なる考えや文化にリアルタイムに触れる。
- ・テレビ会議等により、学校外の専門家と交流して、通常では体験できない専門的な内容を聞く。

## 2 地域の人に学ぶ活動の推進

- (1) 多くの専門的知見をもつ地域の人から学ぶ活動を積極的に取り入れ、本物の体験活動等を通して「3つの創る力」を養う。
- (2) 地域ボランティアや退職教員等による放課後の学習指導等、地域との連携を積極的に行って学習支援を工夫する。
- (3) 学校の特色や地域の実情を踏まえつつ、子どもたちの発達段階にふさわしいキャリア教育やかけがわ道徳を実践し、充実させる。

## 3 読書活動の推進

- (1) 学校図書館の整備を計画的に行うとともに、地域ボランティアや学校司書と連携し、「朝読書」や「読み聞かせ」、「ブックトーク」など、読書に親しむ時間を確保したり、学習・情報センターとしての機能を有する学校図書館を活用した授業を実践したりして、3つの創る力を養う。
- (2) 図書のみならず、新聞にも積極的に触れさせることで、広い視野に立ったものの見方や考え方ができる子どもを育てる。
- (3) 読書の時間、読み聞かせなどの読書活動を推進すると共に、家庭での読書活動を充実するよう働きかけることで、読書好きな子どもを増やす。

## 4 プログラミング教育の充実

- (1) 課題や目的に応じて、意図した処理を行うようコンピュータに指示する体験をさせながら、課題の解決や意図する活動を実現するために一つ一つの動きを組み合わせ、論理的に考えていく力の育成を図る。
- (2) 各教科やその他の様々な学習において、(1)で身に付けた論理的思考力を発揮できるように課題や発問、学習活動を工夫する。

## 5 外国語教育の推進

- (1) グローバル化する社会において、様々な文化や歴史を有する国の人と関わり合うために、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を養う。
- (2) 新かけがわスタンダードを活用し、小・中学校の接続を意識した、一貫性のある英語教育に取り組む。
- (3) 中学校英語科主任を中心として教科書を効果的に活用した授業づくりに対する研修を充実させ、新学習指導要領に対応した授業改善を図る。

## 6 中学校区学園化構想を生かした教育の推進

- (1) 各学園で目指す子ども像を共有し、別冊掛川市の小中一貫カリキュラムに示した9年間の連続性、系統性を意識した指導を小中学校が連携して行う。
- (2) 情報交換や情報共有、専門的な知識や指導の交流等を進めることで、指導を充実させ、学力や学習意欲の向上を図る。
- (3) 市指定研究「小中一貫教育」の研究成果を生かし、各学園で取り組んでいく。

## 7 全国学力学習状況調査分析結果の活用

- (1) 全国学力・学習状況調査の問題や分析委員会調査結果を活用した校内研修を通して、求められている学力を教員が具体的に把握し、授業改善に取り組む。
- (2) 「チア・アップシート」や「チア・アップコンテンツ」等を活用し、児童・生徒の読解力を養う。

## 8 市指定研究校による研究成果の共有

- ・中央小学校 西中学校「働き方改革」(令和2・3・4年度)
- ・第一小学校 東中学校「ICT活用」(令和3・4・5年度)

## 9 学力向上指標 【◎:目標値を超えた数値 ↑:前回と比較して上昇が見られた数値】

- (1) 「学びのユニバーサルデザイン」を重視した授業づくり  
ア 国語の授業の内容がよくわかると答える児童生徒の割合

	小学校	中学校
<b>目標値</b>	<b>30%以上</b>	<b>25%以上</b>
令和3年度	◎37.4% ↑	◎32.8% ↑
令和2年度	新型コロナウイルスの影響により調査中止	
令和元年度	◎37.3% ↑	◎29.7%
平成30年度	※平成30年度調査に、該当質問項目なし	
平成29年度	◎34.3% ↑	◎31.4% ↑
平成28年度	29.2%	21.3%

- イ 算数・数学の授業の内容がよくわかると答える児童生徒の割合

	小学校	中学校
<b>目標値</b>	<b>46%以上</b>	<b>37%以上</b>
令和3年度	◎49.7% ↑	◎38.3% ↑
令和2年度	新型コロナウイルスの影響により調査中止	
令和元年度	◎47.2% ↑	36.4% ↑
平成30年度	41.0%	27.5%
平成29年度	◎49.1% ↑	36.3% ↑
平成28年度	45.9% ↑	27.3%

(2) 読解力を付ける

ア 学習指導要領の領域等における「話すこと・聞くこと」に関する平均正答率

	小学校	中学校
<b>目標値</b>	<b>県の平均正答率以上</b>	
令和3年度	◎78.3%↑	◎82.9%↑
令和2年度	新型コロナウイルスの影響により調査中止	
令和元年度	75.3%	◎75.6%

イ 学習指導要領の領域等における「読むこと」に関する平均正答率

	小学校	中学校
<b>目標値</b>	<b>県の平均正答率以上</b>	
令和3年度	47.7%	◎50.1%
令和2年度	新型コロナウイルスの影響により調査中止	
令和元年度	83.4%	◎75.5%

(3) 「かけがわ道德」を核とした人づくり

ア 「難しいことでも、失敗をおそれないで挑戦する」と答える児童生徒の割合

	小学校	中学校
<b>目標値</b>	<b>24%以上</b>	<b>22%以上</b>
令和3年度	23.7%	◎23.3%↑
令和2年度	新型コロナウイルスの影響により調査中止	
令和元年度	◎28.5%↑	◎23.1%
平成30年度	※平成30年度調査に、該当質問項目なし	
平成29年度	◎28.2%↑	◎24.0%↑
平成28年度	◎26.4%↑	19.5%

イ 「人の役に立つ人間になりたいと思う」と答える児童生徒の割合

	小学校	中学校
<b>目標値</b>	<b>70%以上</b>	<b>75%以上</b>
令和3年度	◎74.8%	◎79.9%↑
令和2年度	新型コロナウイルスの影響により調査中止	
令和元年度	◎78.8%↑	◎77.8%↑
平成30年度	◎74.9%↑	73.1%↑
平成29年度	◎70.3%	70.4%
平成28年度	◎74.0%↑	72.5%

ウ 「将来の夢や目標をもっている」と答える児童生徒の割合

	小学校	中学校
<b>目標値</b>	<b>72%以上</b>	<b>51%以上</b>
令和3年度	58.0%	44.4%
令和2年度	新型コロナウイルスの影響により調査中止	
令和元年度	65.0%	47.8% ↑
平成30年度	69.3%	46.0%
平成29年度	71.2% ↑	48.8% ↑
平成28年度	68.2%	44.7%

(4) 家庭での学習習慣を身に付ける

「家で、自分で計画を立てて勉強をしている」と答える児童生徒の割合

	小学校	中学校
<b>目標値</b>	<b>26%以上</b>	<b>18%以上</b>
令和3年度	◎28.5%	◎18.5% ↑
令和2年度	新型コロナウイルスの影響により調査中止	
令和元年度	◎33.1% ↑	13.6%
平成30年度	◎28.6% ↑	15.3%
平成29年度	◎27.1% ↑	◎19.2% ↑
平成28年度	23.1%	14.2%

(5) 本に親しみ、読書習慣を身に付ける

家や図書館で、普段(月～金曜日)、1日当たり30分以上読書する児童生徒の割合

	小学校	中学校
<b>目標値</b>	<b>37%以上</b>	<b>35%以上</b>
令和3年度	35.2%	29.4%
令和2年度	新型コロナウイルスの影響により調査中止	
令和元年度	◎42.2%	29.7%
平成30年度	◎43.6% ↑	34.5% ↑
平成29年度	◎38.1%	32.7% ↑
平成28年度	◎39.0% ↑	29.3% ↑

## 第4章 令和の家庭のものがたり

### 1 家庭の学びの在り方の研究

掛川市の各学校では、家庭教育支援資料「かけがわの子どもたち」を活用し、家庭での取組を働きかけ、各家庭においては、「子どもの力を伸ばす!家庭教育4つのポイント」を視点に「家庭のものがたり」の実践を進めてきました。

令和2年度末、掛川市のすべての学校に一人一台端末が整備されました。各学校では、かけがわ型GIGAスクール構想のもと、個別最適な学びと協働的な学びを一体的に充実させ、「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指しています。子どもの学力や未来への可能性を最大限に引き出すためには、学びを学校に閉じることなく、家庭や地域でも学ぶことができる環境を整える必要があります。また、乳幼児期から義務教育終了(0~15歳)までにおける子どもの成長には、家庭の役割は大変重要であるため、小学校教育との円滑な接続を図るなど園小中一貫教育を推進する中で、家庭・地域との一層の連携、協働を進め、市民総ぐるみで支えていくことも重要です。

そこで、掛川市では、子どものもつ自ら学ぶ力を信じ、学校、家庭、地域が相互に連携してその学びを支えることができるように、掛川市における家庭での学びの在り方について研究し、その全体構想を「かけがわ家庭の学びグランドデザイン」として表しました。このグランドデザインの作成がゴールではありません。これを十分に活用して、子ども自らの学びを引き出すための望ましい家庭のかかわり方や地域の役割について理解を深め、市民総ぐるみで家庭の学びについて考え、新しい「家庭のものがたり」をつくっていきましょう。

### 2 かけがわ家庭の学びグランドデザイン



(1) 大切にしたい見方・考え方

ア 子どもは自ら学ぶ力を持ち、その学びは園・学校で閉じることなく切れ目なく続く。

(子どもの学びが土台)

イ 子ども自らの学びは、乳児期から始まり、家庭のかかわりにより引き上げられていく。

ウ 家庭のかかわりは、子ども自らの学びの広がりに合わせて変化していく。

(2) 3つの創る力を伸ばす子ども自らの学び

**乳児期(学びの土台 愛情いっぱい)：心と体で感じる【身近な環境から学ぶ】**

スキンシップや温かな表情、言葉かけから、「自分が大切にされていること」を感じ取り、親子の愛着が形成されます。そうしてたくさんの愛情を感じることで、他者を信頼し、安心して周りのひと・もの・ことに働きかけられるようになる土台がつくられます。

**幼児期(学びの芽生え 興味いっぱい)：夢中になって遊ぶ【遊び・体験から学ぶ】**

乳児期に獲得した安心感・信頼感を基盤に、興味や関心を広げていきます。この時期の遊びは「やってみたい」という思いを基に、頭も心も体も繰り返し動かすことで、学びの芽生えへとつながっていきます。

**児童期(自覚的な学び やる気いっぱい)：進んで問題解決に取り組む【仲間・地域から学ぶ】**

幼児期までに体験を通して獲得した自信や他者を大切にする気持ちを基に、自分の取り組むべき課題を自覚して学びを進めます。その際、解決に向けて仲間と協力したり、進み具合を確かめ、改善したりすることで、より意欲的に追究するようになっていきます。

**青年期(創造的な学び 夢いっぱい)：夢に向かって挑戦する【多様な環境から学ぶ】**

児童期までに少しずつ発揮し続け、育ててきた「3つの創る力」をより効果的に働かせながら学んでいきます。自分の将来の夢や地域の課題など正解のない問題にも、最適解や納得解を生み出そうと取り組みます。

(3) 子ども自らの学びを引き出す家庭のかかわり(※「」内は、かかわり方のポイント)

・乳児期：心と体でふれあおう

「笑顔・スキンシップ・語りかけ」

・幼児期：思いを受け止め、一緒に行動しよう

「過程をほめる・目を見て聴く、話す・成長を喜び合う」

・児童期：成長を認めて寄り添おう

「相談にのる・一緒に考える・共に成長を振り返る」

・青年期：心をつないで、応援しよう

「経験を語らう・見守る・挑戦の後押しをする」

(4) 使用場面及び使用方法

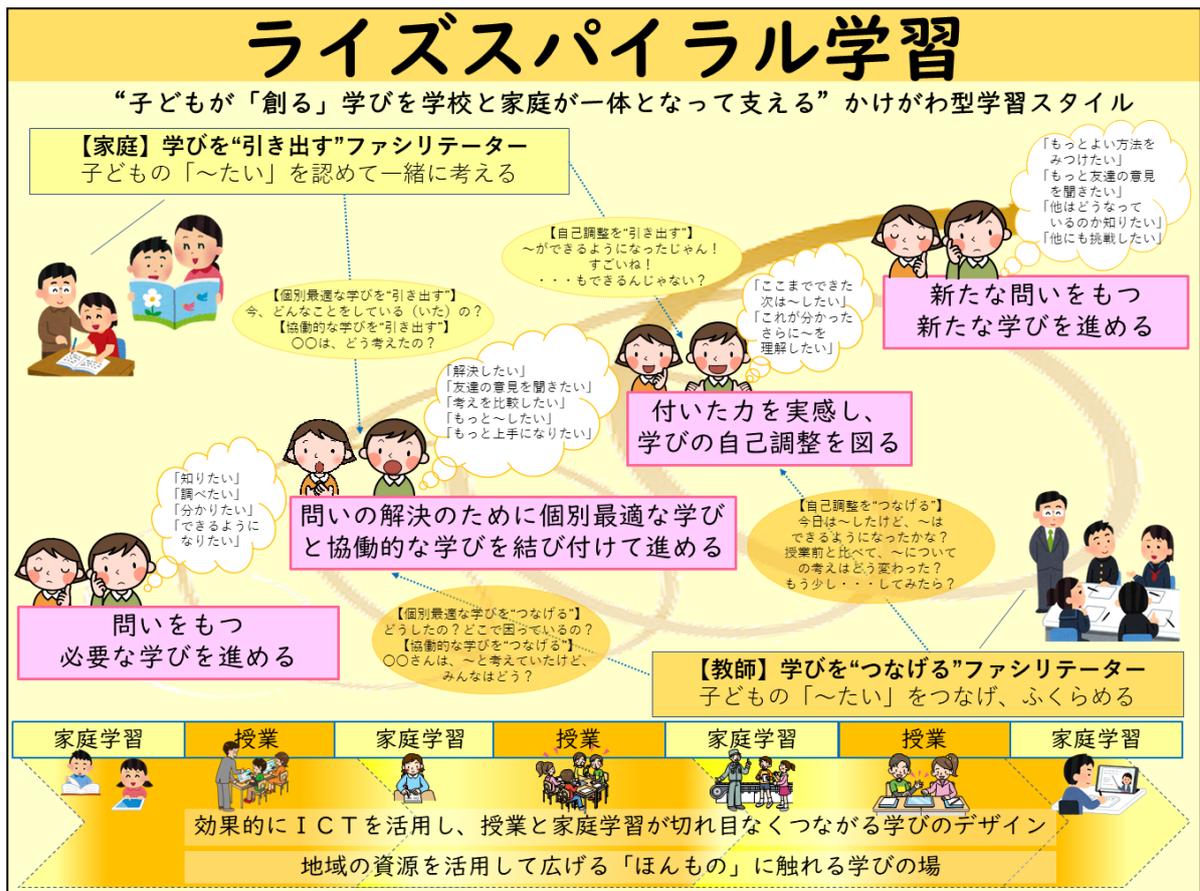
ア 見通す：子どもの学びと家庭のかかわりの変化、地域の役割等を大まかにつかむ。

イ 見取る：子どもの学びの様子や自分のかかわり方を振り返り、これからについて考える。

ウ 見直す：グランドデザインを見て考えたことや気付いたことをもとに、他の人と語り合う。

### 3 子どもが「創る」学びを学校と家庭が一体となって支える

#### (1) かけがわ型学習スタイル「ライズスパイラル学習」



「第3章学びのものがたり 1(1)」において示した視点を基に、新たな学びのスタンダードを実践するための単元、授業設計モデルとして、家庭の学びブランドデザインの理念に照らし学習者である子どもを中心として整理したものです。子ども自らの学びが、学校で閉じることなく切れ目なくつながり、家庭や教師の望ましいかかわりによってライズスパイラル（上昇らせん）を描きながら高まり、深まっていく様子を表しています。

#### ア 学びを“引き出す”ファシリテーターとしての家庭のかかわり

子どもの「個別最適な学び」「協働的な学び」「自己調整」を引き出し、学びが切れ目なく続いていくようにするために、子どもの学びに対する「～したい」という思いを認め、ファシリテーターとして一緒に考えようと寄り添うかかわりが大切です。

#### イ 学びを“つなげる”ファシリテーターとしての教師のかかわり

子どもの「個別最適な学び」「協働的な学び」「自己調整」を支え、促すことで、子どもの学びに対する「～したい」という思いが授業前後でつながり、ふくらんでいくように、ファシリテーターとして問いかけたり子どもの発言に対して切り返したり価値付けたりすることが大切です。

## (2) 関連資料

家庭の学びグランドデザインのことや関連する内容、家庭でのかかわり方についてより詳しく知りたいときは、以下の資料をご参照ください。

- ① かけがわ家庭の学びポータル  
： 家庭の学びに関するコンテンツやリンク集  
※以下、②～⑤のリンクもあります。



- ② 家庭の学びグランドデザインまるわかりガイド  
： グランドデザインの見方・考え方



- ③ 家庭の学びファシリテーターのすゝめ  
： 家庭の具体的なかかわり



- ④ 教えて!きんじろうさん  
： 家庭の学びの意義や用語等の解説



- ⑤ かけがわ家庭の学び応援団  
： 年齢や内容に応じた相談先一覧



## 第5章 我が校のものがたり(別冊)

各学校では、子どもたちに3つの創る力を身につけさせるために、これまで次のような様々な実践を積極的に進めてきました。これを参考に各学校が自校のものがたりをつくっています。

### 学力向上のための取組内容

#### 1 研修の充実

##### 【各小学校の令和3年度研修テーマ】

主体的に学び合い、自分の考えを深める授業
進んでかかわり、学び合う子 ~教科の見方・考え方を働かせて学び合う授業づくり~
考えをつなぐ授業
自ら学ぶ みんなと学ぶ授業づくり ~考え、伝え、つなげよう~
学びが深まる授業 ~ICTの活用~
ともに学び合う ~1人1台端末を効果的に活用した学び合いの授業づくり~
根拠をもって判断し表現する力を育成する授業づくり
学びを深める子の育成 ~子供中心の授業づくりを通して~
自ら問いをもち、解決しようとする子の育成
どの子も学び続ける授業の創造
主体的に学ぶ児童の育成 ~ICTを活用した対話の設定を通して~
子どもがすすんで学びに向かう力を育む授業 ~1人1台PCを活かして~
キャッチワードを使って、思いを伝えられる子 ~論理的思考力と発言力をつける指導~
共によりよく生きようとする子の育成 ~子供たちが自ら学び続ける授業づくりを通して~
「~たい」でいっぱい授業 ~主体的な学びを促す仕掛けを通して~
対話を通して考えを深める授業
対話を通して考えを深める授業
対話を通して考えを深める授業
主体的に関わり合って学びを深めていく子
主体的に学び合う子 ~ICTの効果的な活用を通して~
話し合い活動を通して「できた」「わかった」を共有する授業 ~学習課題と学習問題の工夫~
「根拠・理由を明確にして 進んで自分の言葉で伝え合う子」を育てる授業

##### 【各中学校の令和3年度研修テーマ】

進んでかかわり「学び合う」生徒 ~「学び合い」を意図的に取り入れた授業の工夫~
仲間との学び合いを通して、全員が「わかった」「できた」と感じる授業づくり ~一人一台端末による新たな学びの研究 ICT活用研究~
主体的に問題発見・解決していく力の育成
NIEを用いた探究的授業改善
自ら考え 高め合う かしこい生徒 1期「自ら進んで考え、学ぼうとする生徒」
自ら気づき 考えを深め 追究し続ける生徒の育成
対話を通して考えを深める授業
主体的・対話的で深い学びを目指して ~一人一人がICTを効果的に活用する~
生徒一人一人の学びを保障する『学び合い』の実現を目指して

## 2 授業改善

- 付けたい力を明確にした単元構成・授業展開の意識化
- 学びのユニバーサルデザインによる授業改善（視覚化、焦点化、個への対応）
- 授業過程を意識した授業展開の工夫と内容の充実
- 主体的に学ぶ意欲を高める授業・主体的に学ぶ姿を見取る視点の共有
- 「押さえる」「仕掛ける」「確かめる」を意識した授業づくり
- 主体的・協働的な学び（アクティブラーニング）の視点を取り入れた授業づくり
- かけがわ型スキル6項目を活用する授業づくり
- 探究的な学習や協働的な学習を取り入れた授業づくり
- かけがわ型小中一貫カリキュラムを活用した年間計画の見直し、授業案作成
- 対話をうみだすための ICT 機器の活用、ICT 機器活用能力向上のための取組
- 見せ合い授業の実施（子どもが1つ上の学年の授業を見る）、学習自慢展（ノートの展示）
- 授業改善の共通実践項目を意識した授業づくり
- 子どもが主体的に学ぶ課題設定や思考を大切にした板書の工夫
- 振り返りの時間を大切にする授業構成
- 学習規律・ルールの全校共有と徹底指導
- 高学年教科担任制及び教科チームによる研修、研修テーマに沿った自己テーマの設定
- ICT を活用した外国語活動、考え、議論する道徳、NIE 推進、防災教育

## 3 言語活動や言語環境の充実

- 言語活動の充実を核とした校内研修の推進
- 付けたい力に則した交流活動の設定・学び合いの時間・対話の時間の設定
- 2つの「きく」（聴く・訊く）場面を取り入れる
- 「今月の詩」、名文の暗唱・音読タイムや音読コンテスト、学習成果発表会
- 話す・聴く・書く力のレベルアップのための「段階表」の活用
- 「対話レベル表」を活用した具体的な指導

## 4 少人数指導・個別支援

- 少人数指導や T・T での指導の実施
- 達成感や充実感を味わわせるために、子ども一人一人が学ぶ過程の重視
- 個の特性に沿った指導・内容の定着が不十分な子に対する丁寧な個別支援

## 5 習熟度別指導

- 少人数指導（算数・数学）における、習熟度別クラスの実施
- 課題をやりきらせるための個に応じた指導の実施
- 朝活動の時間を活用した個別指導

## 6 朝の学習活動

- 基礎的な内容の定着を図る反復練習、新聞を活用した読解力向上学習
- 短時間で条件に合った文を書くことを目指した作文タイムの設定、書く力を付ける日記指導
- 表現力を養うスピーチタイム／コミュニケーションタイムの設定

## 7 放課後学習支援／補充学習

- 年間数回程度の放課後学習
- 地域ボランティアによる児童生徒の学習機会の確保
- テスト前の生徒同士による学習会

## 8 長期休業中の学習支援

- 夏季休業中に教師による補充学習の実施
- 夏季休業中に卒業生や地域ボランティアによる補充学習の実施

## 9 家庭学習支援

- 授業とつながる家庭学習、授業のための準備学習（予習・反転学習）
- 学園で家庭学習の手引きの配付
- 学園で9年間を見通した、学習面・生活面の基礎基本の力を支える取組
- 家庭学習時間の設定、「選択学習」「自主学習」等の学習内容の指導、学習相談会の実施
- 「ノーメディアデー」の設定
- 「漢字・数学・英語のIPノート」への取組による家庭学習の継続
- eライブラリアドバンスの活用
- 帰宅後すぐの学習習慣の定着のための日課の工夫
- iPadのアプリの活用による基礎学力の向上

## 10 読書活動の充実

- 授業における学校司書の活用
- ボランティアによる読み聞かせの実施
- 毎朝の読書タイムの実施、すき間時間の読書の奨励
- 家庭での読書啓発（家読の推進）・親子読書・週末読書・週1回のブックレンタルデー
- おすすめの本リストの紹介で読書の質を高める取組の推進
- 読書目標・必読図書の設定
- 市立図書館司書によるブックトーク

## 11 朝活動の時間等を活用したドリル学習

- 基礎学力定着のためのドリルタイムの設定
- ステージ末の「期末ドリルタイム」の設定
- 日記や、条件に合った文を短時間で書く作文タイム
- チア・アップシートの活用
- 対人スキルの基礎技術を身に付けるための、1～2分の会話活動

## 12 校内テスト

- 年数回、合格点を設定した定着テストの実施
- 「チャレンジテスト」「とことんテスト」等による、基礎・基本の定着の徹底
- ステージ末の1週間の中で、学習内容の定着を図る小テストを実施

## 13 調査問題の分析

- 学力調査を採点し、日々の授業に生かすための学力調査採点研修の設定
- 学力調査問題・結果の分析から、自校の課題をつかむ
- 標準学力検査など客観的なデータ分析に基づく第三者評価の導入

## 14 学園・地域連携

- 学園共通の研修テーマを設定し、実践・園小、小中の円滑な接続のための取組
- 学園合同研修会で12年間を見通した教育、実践について協議、成果と課題を共有
- 地域コーディネーターと連携し、地域の教育力を生かして地域貢献できる力の育成
- 中学校教員とのTT授業、地域講師による授業、地域から学ぶ「掛川学」、数学塾等

